

日々の聖句

9月 伝道



『日々の聖句』の使い方

この冊子は聖書を読み、学び、黙想するための手引で、独立した読み物ではありません。かならず、聖書を開いてその日の箇所を読み、参照箇所も開くようにしてください。

聖書の黙想には、古代から「レクシオ・デヴィナ」という方法が用いられました。それは次の四つの段階を進んで聖書を読む方法です。英語の四つの「R」を意識するとよいでしょう。

一、読む (Read) 心を静めてゆっくりと、何回でも、聖書を読みます。聖書は、神の言葉ですから、神が語っておられる声を聞くようにして読みます。

二、黙想する (Reflect) 黙想は聖書との対話です。聖書になぜこのような言葉が書かれているのだろうか。それが自分にとってどんな意味があるのか、聖書に問

い、聖書に答えてもらおうようにして、その箇所の中心的な部分を思い巡らします。

三、祈る (Respond) この祈りは、黙想によって得られたことに対する応答の祈りです。それは悔い改めや行動に結びつく決心であるかもしれませんが、あるいは、まだ解けなかつた疑問や解決していないことがらに対するさらなる求めであるかもしれません。それがどんなものであっても、正直に祈ることが大切です。

四、瞑想する (Remain) 祈りに続いて、しばらくの間、神とのまじわりに留まりましょう。「黙想」は「聖書との対話」ですが、「瞑想」は「神との対話」です。神の臨在の中にとどまることによって、御言葉が血肉となり、祈りが生活の中で実現していきます。「瞑想する」ことは神とのまじわりに「留まり」、自分自身を神の手に「委ねる」ことと言い換えることもできます。

神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。(27)

「かたち」とは、見えないものを表すものです。神が人をご自身の「かたち」に創造されたのは、神が人を通して、ご自身を、ご自分が創造された世界に示すためでした。

そのことは、神が御子を人として世に送られたことから分かります。「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」(ヨハネ 1・18)とあるように、御子は見えない神を表すために人となられました。御子こそ「神のかたち」です。まさに「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れ」(ヘブル 1・3)です。神は他の何者によってもなく、人となられた御

子によってご自分を現されたのです。

人は罪のために自らのうちにある「神のかたち」を傷つけ、失ってしまいました。人となられた御子によって再び、「神のかたち」を取り戻すことができるようになりました。イエス・キリストの贖いと復活によって、人は、「霊と心において新しくされ続け、真理に基づく義と聖をもって、神にかたどりに造られた新しい人を着る」者となるのです(エペソ 4・23、24)。

キリストが「第二のアダム」であるように、キリスト者も「新しく造られた民」、「神の作品」となって神の栄光を表していくのです。神は、ご自分の栄光を世界に表すために、キリスト者を生み出されたのです。

祈り 主よ。あなたの栄光を表すために、私が造られていることを、いつも覚えさせてください。

あなたは自分のために、ゴフェルの木で箱舟を造りなさい。(14)

神はノアに箱舟を造るよう命じました。それはノアとその家族、また、多くの動物を救うためでしたが、同時に、それは、その時代の人々へのメッセージとなりました。ノアは箱舟を通して人々に神からのメッセージを伝えたのです。

たつた八人のノアの家族が、大きな舟を造り出したのですから、まわりの人たちは何事が起こったのかと怪しみ、「どうしてこんなことをしているのか」ときいたことでしょう。その時、ノアはやがて来る洪水のことを語りました。その時代には、誰一人ノアの言葉を信じる者はなく、かえってノアのしていることをあざ笑いました。しかし、ノアは、来る日も来る日も黙々と箱舟を造り、神の義を宣べ伝える者となりました(第二ペ

テロ2・5)。

キリスト再臨の日がノアの洪水の日と比べられているように、今日のキリスト者も、ノアと同じように、信仰という「救いの箱舟」を造り、キリストの救いを宣べ伝えていきます。信仰者が、世にあつて世に染まらず、信仰に励み、「自分の救いを達成」(ピリピ2・12)しようと務める姿は、

ノアが箱舟を造る姿に似ています。信仰者が自らの救いを確かなものとしようと励むことは決して利己的なことではありません。その事自体が「義の宣教」になるのです。ノアの時代、箱舟の完成が近づけば近づくほど、神の裁きの日が近づいたように、今日では、伝道が進むにつれて、世の終わりの救いの日が近づくのです。

祈り 主よ。この時代に、救いの箱舟を築き、人々に救いを証しする者としてください。

あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。(1)

私たちの多くは、居心地のよいところに留まっていたという願望を持っています。しかしそこに留まることが、私たちをそこに縛り付け、神の祝福の道に歩むのを妨げる場合もあります。神がアブラムに語った言葉に、「あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家」とありますが、私たちは、そうしたものの他に、「あなたの計画」、「あなたの願望」など、「あなたの…」と呼ばれるものを持っています。神がアブラムに「わたしが示す地へ行きなさい」と命じたように、私たちにも「あなたの…」と呼ばれるものから「わたしの…」と言われるものへと導き出そうとされることがあります。その時、私たちはそれにどう答え

るでしょうか。

神がアブラムを召されたのは、アブラム自身の祝福のためばかりでなく、アブラムによって他も祝福されるためでした。アブラムはやがて「アブラム」(多くの国民の父)となり、イスラエルの祖先となります。世界の救い主は「アブラハムの子」として生まれ、「地のすべての部族は、あなたによつて祝福される」との約束が成就します。同じように、主は、「行つて実を結び、その実が残るようになる」(ヨハネ 15・16)と言われ、私たちが遣わされたところで伝道の実が残る、それがより多くの人の究極の祝福となるように願つておられるのです。

祈り 主よ。私たちをコンフォオダブル・ゾーンから引き出し、あなたのために実を結ぶ者としてください。

ほかにだれか、ここに身内の者がいますか。あなたの婿や、あなたの息子、娘、またこの町にいる身内の者をみな、この場所から連れ出しなさい。(2)

ソドムへの裁きについて知らされた時、アブラハムは、「ソドムに正しい人が五十人いてもそこを滅ぼすのですか」と言つて、ソドムのためにとりなしました。アブラハムは五十人からはじめて最後は十人まで人数を減らしていきましました。ソドムには甥の口トと妻、娘たちがいました。娘たちはソドムの男性に嫁いでいましたが、未婚の者もふたりいました。それでアブラハムは、ソドムには主を知る者が少なくとも十人はいると考えたのでしよう。主はアブラハムに「滅ぼしはしない。その十人のゆえに」(創世記18・32)と約束し、アブラハムはそれを聞いて安心しました。

ところが、口トの婿たちは主を知らず、主の言葉に聞き従いませんでした。口トは婿たちに「主はこの町を滅ぼそうとしておられる。早く逃げなさい」と言いましたが、彼らはそれを「悪い冗談」(14)としか聞きませんでした。口ト自身はソドムの町の悪に染まることはなかったとしても、婿たちに信仰を証しすることができていなかったのです。

私たちは、親族の救いのために祈り、また、証しをしているでしょうか。私たちには、主の言葉を、また、私たちの言葉を信じてくれる「身内」がどれほどいるでしょうか。

祈り 主よ。私たちは親族に証しをする時、常に困難やためらいを感じ、あきらめてしまいがちです。私たちに信仰と力を与え、普段から、あなたを証しできるよう助けてください。

私の父、母、兄弟、姉妹、また、これに属するものをすべて生かして、私たちのいのちを死から救い出す、と誓ってください。(13)

ロトと対照的なのがラハブでした。ロトは自分の家族を救うことができませんでしたが、ラハブはその信仰によって家族・親族を救いました。

彼女は、イスラエルのふたりの偵察を匿い、その見返りに、自分の家族の救いを願い出しました。彼女のしたことは、主なる神への信仰から出たことで、それは神に受け入れられました。彼女はイスラエルがどのようにしてヨルダンの東岸までやってきたかを聞き、イスラエルの進軍の背後におられる主なる神を心から認め、主を恐れる者となっていたのです。

ふたりの偵察が復命し、イスラエルがエリコを攻めるまでは何日かありました。ラハブはその間

に、主がエリコの町を滅ぼそうとしていることを告げ、一族を自分の家に集めました。そして、集まった一族はヨシユアの命令によって救い出され、イスラエルの民に加えられました。「しかし、遊女ラハブと、その一族と、彼女に連なるすべての者をヨシユアが生かしておいたので、彼女はイスラエルの中に住んで今日に至っている」(ヨシユア6・25)とある通りです。そればかりか、ラハブはイエス・キリストの系図の中にその名を残しています(マタイ1・5)。主はラハブを先祖としてお生まれになったのです。

ラハブの信仰と証に私たちも倣いたいと思います。祈り 主よ。私たちが、あなたを恐れ、親族を思つて、その救いのために力を尽くすことができよう、助けてください。

私は今、イスラエルのほか、全世界のどこにも神はおられないことを知りました。(15)

アラムの將軍ナアマンはツアラアトにかかっていました。彼は、イスラエルから連れてきた召使いの娘から、預言者エリシヤのことを聞き、エリシヤに病気の癒しを祈ってもらうために出かけました。しかし、エリシヤはナアマンに会おうとせず、ただ「ヨルダン川で七回身を洗え」とだけ命じました。ナアマンは怒って帰ろうとするのですが、部下になだめられ、エリシヤの言葉に従うと病気がたちまちに癒やされました。ナアマンはエリシヤのところに戻って「私は今、イスラエルのほか、全世界のどこにも神はおられないことを知りました」と言つて、唯一のまことの神への信仰を告白しています。

神はイスラエルを神の民として選びましたが、

それは、神がイエスラエルだけの神となるためではありませんでした。むしろ、イスラエルを通して、神こそ、全地の主であることを知らせるためでした。イエスが後に、「また、預言者エリシヤのときには、イスラエルにはツアラアトに冒された人が多くいましたが、その中のだれもきよめられることはなく、シリア人ナアマンだけがきよめられました」(ルカ4・27)と言われたように、神の民が自分たちの神を締め出し、他の国の人がイスラエルの神を受け入れたというのは皮肉なことですが、神は、旧約の時代から、全世界の人々の救いを願い、それに向かって歴史を進めておられたのです。

祈り 主よ。生けるまことの神であるあなたが、全世界のすべての人の神であることを証しするこ
とができますように。

われわれのしていることは正しくない。今日は良い知らせの日なのに、われわれはためらっている。もし明け方まで待っていたら、罰を受けるだろう。さあ、行こう。行つて王の家に知らせよう。(9)

アラムの軍勢がサマリアを包囲し、サマリアに食べ物が無くなつた時、町の外にいた四人のツアラアトに冒された者たちが、餓死するよりはアラムの陣営に行つて食べ物に与つたほうがよいと考え、アラムの陣営にやつてきました。ところが、アラムの兵隊は食糧などを置き去りにしたまま本国に引き上げていました。主がアラムの陣営を幻によつて脅したので、自分たちが大軍に攻められようとしていると思つて、急いで逃げ帰つたのです。四人は無人となつた陣営で食べるだけ食べ、欲しいものを隠したりしていましたが、はつと気

付いて、このことをサマリアに知らせに行きました。神の救いを見た四人には、アラムの軍勢に取り囲まれ、食糧を断たれ、飢えている人々に、「敵は去つた」と知らせる役割がありました。彼らはそのことに気付いたのです。

キリストの救いに与つた私たちもまた、この四人と同じように、その救いを告げ知らせる役目を与えられています。キリストが与えてくださる豊かな救いの恵みを、靈的に飢えている人々に知らせないなら、それは「正しくない」ことなのです。キリストの救いに与っている「今日」が、それを知らせる「良い知らせの日」なのです。祈り 主よ。あなたの救いの恵みを他の人に知らせないでいることが「正しくない」ことであることに気付かせてください。そして、正しいことをする勇気を与えてください。

あなたがたはわたしの証人、——主のことば——わたしが選んだわたしのしもべである。(10)

神の民について、神は「わたしの栄光のために」(7)、「わたしの証人」(10)として、また「わたしの栄誉を宣べ伝える」ために造ったと言っておられます。

では、神の民は神について何を証しするのでしょうか。イザヤ43章で、神はご自身について、「わたしがあなたを贖った」(1)、「わたしはあなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主」(3)、「わたしがあなたとともにいる」(5)、「わたし、このわたしが主であり、ほかに救い主はいない」(11)と証ししておられます。神の民は、神がご自身を証ししておられますそのままを証しするのです。神の民は、おひとり

の神が、人を贖い、救い、人と共にいて愛してくださることを証しし、神の栄光を表すのです。

新約時代の神の民、キリスト者も、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」(マタイ 28・20)、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」(ヨハネ 14・6)と、自らを証しておられるキリストの証言のとおり、キリストを証しします。御子が御父の語られるままを証しし、御霊が御子が言われるままに証しするように(ヨハネ 14・10、26)、キリスト者は三位の神の証を自分の証とするのです。

祈り 主よ。私たちの証が、あなたがご自身を証しされるものと同じでありますように。そのため常にあなたの証に耳を傾けさせてください。

あなたの道が地の上で、御救いが すべての国々の間で知られるために。(2)

イスラエルは「選ばれた民」「選民」でした。

しかし、イスラエルが選ばれたのは、自分たちだけが救われ、祝福されるためではありませんでした。主なる神こそが救いの神であることを、他の国々に告げ知らせ、他の人々に神の救いと祝福をもたらすためでした。

ところが、イスラエルは自分たちだけが救われ、他は滅びるのだと考え、誤った選民意識に陥り、他の国々に神の救いを告げ知らせるといふ使命を果たしませんでした。それで主は、キリスト者を新しく「選びの民」(テトス2・14、第一ペテロ2・9)とし、彼らを国々に、世界に、地の果てまでも遣わし、福音を告げ知らせるようにしてくださいました。

福音は地理的には、いったん全世界に広まりました。しかし、宣教の自由を許さない国が増えました。かつては、多くのキリスト者がいて、リバイバルさえ起こった国々なのに、今では独裁的な政権によつて宣教の門戸が閉ざされ、キリスト者が迫害されているところがいくつもあります。

それと同時に、福音に対して興味も関心も持たない世代、信仰を過去の遺物として嫌う人々が生まれました。かつてはヨーロッパからアメリカやアフリカに、アメリカからアジアへと宣教がなされましたが、今日ではヨーロッパやアメリカが宣教されなければならない地域になっていると言われていきます。福音を「全世界」に届ける努力は今も必要なのです。

祈り 主よ。すべての人に福音が伝えられるため、私に何ができるかを教えてください。

わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。(19)

イエスが宣教を開始して最初にしたことは弟子をとることでした。最初の弟子はペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネの四人の漁師でした。彼らはガリラヤ湖で魚を捕っていました。イエスは彼らを魚ではなく「人間をとる漁師」にしようとしたのです。「人間をとる」というのは人々をキリストのもとへ導くことを意味しています。

漁師が網を投げて一度に多くの魚を捕るように、この後、弟子たちは多くの人々をキリストのもとに導くようになります。宣教のわざは全世界にまで広がります。しかし、宣教の始まりはごくわずかな弟子たちからでした。イエスのまわりにはいつも大勢の人々が群がっていました。イエスはその中からわずかな人々だけを選び、彼らを

弟子として訓練しました。イエスは大勢の人々をあわれみ、彼らを助けましたが、直接に群衆を組織して、人々を動かすようなことはしませんでした。イエスに人気があるからという理由だけで群がって来る人々を信頼せず、彼らがイエスから遠ざかって行く時もそのままにしました。イエスはやがて福音が全世界に宣べ伝えられるようになることをご存知でしたが、その働きをガリラヤという辺境の地で、ごくわずかな人々を訓練することから始めたのです。

どの時代にも、キリストに従う少数の人々が、宣教に携わり、その輪が広がり、地域を変え、国を変え、世界を変えてきました。それは遠回りに見えますが、宣教への最短の道なのです。

祈り 主よ。私たちがイエスの弟子になることが宣教の出発点であることを教えてください。

また、群衆を見て深くあわれまれた。彼らが羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていたからである。(36)

残念なことですが、自分たちの誇りのためや競争心から伝道活動をするようなことがあります。

自分たちの教会の人数を増やすためや、特定のグループに人を引き込むためなど、純粋な動機からではなく、間違った動機から伝道するといったことは、初代教会にも見られました(ピリピー・15、17)。パウロはそれでもキリストが宣べ伝えられているなら、それを喜ぶと言っていますが(ピリピー・18)、それは自分のことを案じてくれている人々を慰め、励ますために言ったことで、正しい動機で伝道することが大切なことは言うまでもありません。

では、伝道はどのような動機でなされるべきな

のでしようか。イエスはどのような動機で伝道したでしょうか。きようの箇所は、イエスが人々を「深くあわれんだ」と言っています。この「深くあわれむ」という言葉は、良いサマリア人が盗賊に襲われた人を見つけた時や、放蕩息子の父親が落ちぶれた息子を見つけた時に「かわいそうに思った」(ルカ10・33、15・20)というところで使われています。サマリア人も父親もあわれみの心に動かされて行動しました。イエスもまた人々へのあわれみの心に動かされて伝道したのです。自分が神のあわれみによつて救われていることを知り、神が人々をあわれんでおられるのと同じ思いをいただき、あわれみに動かされて伝道へと導かれていきたいと思えます。

祈り 主よ。私たちが真実なあわれみの心から伝道に携わることが出来ますように。

話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあつて話される、あなたがたの父の御霊です。(20)

イエスは十二弟子を派遣するにあつて、彼らにさまざまな指示を与えましたが、その指示の中には、後の時代にあてはまるものがいくつかあります。この時、イエスラエルの各地に派遣された弟子たちは会堂でむち打たれたりすることはありませんでしたし、総督や王たちの前に連れていかれるようになるのは、もつと後のことです。イエスは、十二弟子を目の前にしながらも、その後にくる弟子たちのことを思いながら、後の時代に必要となる指示を、あらかじめ与えたのです。ですから、ここに書かれていることは、当時の弟子たちにはあてはまっても、今日の私たちにはあてはまらないと言うことはできません。

どの時代であつても、福音を伝え、証ししようとする者に求められるのは、神への信頼です。福音を語る時も、それを自分の力に頼つてするのではなく、聖霊が語らせてくださることを信じ、それに頼ることが、なにより大切です。

終わりの時代には、人々は健全な教えから離れていきます。福音を語つても、聞いてくれる人は少なく、それに答える人はなほ少ないのです。そんな中で福音を語り続けるためには忍耐が求められます。「最後まで耐え忍ぶ」(22) ことの中には、神に信頼し、自分の信仰を守り通すことと共に、キリストに従つて、福音を証しし続けることも含まれているのです。

祈り 主よ。「時が良くても悪くても」(第二テモテ4・2) 忍耐をもって御言葉を語る事ができるよう、助けてください。

見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。(20)

この部分は「宣教の大命令」と呼ばれてきました。ここには「あらゆる国の人々を弟子とせよ」という「命令」があります。しかし、ここには「命令」と同時に「約束」があります。その約束のひとつは「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています」(18)です。私たちは、自分の力によってではなく、主が授けてくださる権威によって伝道するのです。この権威を受ける時、私たちは人を恐れるのではなく、真に権威あるお方を恐れて伝道することができようになります。

もうひとつの約束は「わたしは：あなたがたとともにいる」です。主は伝道する者に、権威だけでなく臨在をも約束してくださいました。伝道が

人々にイエス・キリストと出会わせることであるなら、伝道する者は、常に主の臨在の中にいて、主を表す者でなければなりません。主は、ここで、「わたしはあなたと共にいて、あなたを通して、わたしの臨在を現す」と約束しておられるのです。

パウロはコリントで「わたしがあなたとともにいる」(使徒 18・10)との主の言葉を聞きました。パウロは、主の臨在を信じて伝道し、また「私の願いは：私の身によってキリストがあがめられることです」(ピリピ 1・20)と言って、主の栄光を彼自身の生き方と働きを通して人々に示したのです。

祈り 主よ。私たちの伝道が、あなたの臨在を持ち運ぶものとなりますように。主が共におられることを表すことができますように。

あなたの家、あなたの家族のところに帰りなさい。そして、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを知らせなさい。(19)

悪霊を追い出してもらった人はイエスのお供をしないと願いましたが、イエスは「あなたの家、あなたの家族のところに帰りなさい」と言つて、彼に、その地に留まつて、その地の人々に主のみわざを証しするようにと言いました。

「安心して帰りなさい。」これは、イエスが癒しの後に人々に与えた言葉です。癒される以前の彼らは病いのために、神殿にも行けず、家族から離され、社会から遠ざけられていました。イエスの癒しには、身体的ばかりでなく、社会的、宗教的な回復も含まれていて、それは彼らを本来あるべきところに戻してくれるのです。

悪霊に憑かれていた人への「あなたの家、あなたの家族のところに帰りなさい」という言葉は家族から引き離されていた、この人に完全な回復を与える言葉でした。しかし、イエスはそれに加えて「そして、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを知らせなさい」と命じています。主の救いは、たんに人をもといたところに戻すだけでなく、主の救いを証しするという新たな使命を与えて、もといたところへと派遣するのです。悪霊を追い出してもらった人は、イエスの言葉通りデカポリスの町々でイエスの救いを証言しました。祈り 主よ。私が救われ、もとあるところに回復されたのが、その救いを、そこで証しするためであることを、深く心に留めることができますように。

子どもたちを、わたしのところに来させなさい。(14)

アルブレヒト・デューラーの銅版画に、大人がイエスの話を聞いている間、コマを回して遊びに没頭している子どもの姿を描いたものがあります。デューラーは、難しい顔をしてイエスの話を聞いている大人よりも、イエスのもとで安心して遊びに興じている子どものほうがイエスの心に近いのではないだろうか、その絵によって問いかけているように思います。

実際、イエスは、自分の教えを理解できない子どもであつても、温かく見守り、子どもたちを大切にしました。ある時は子どもを真ん中に立たせ、「まことに、あなたがたに言います。向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません。ですから、だれでもこの

子どものように自分を低くする人が、天の御国で一番偉いのです」(マタイ18・3〜4)と言って弟子たちを戒めたこともあります。

弟子たちが、イエスから子どもを遠ざけようとした時、イエスは弟子たちに対して「憤って」います。イエスがどんなに子どもを愛しておられたか、子どもたちを大人と同じ、いや大人以上のものとして扱っておられたかが分かります。子どもはイエスとの触れ合いの中で主を知っていきまします。ですから、あらゆる方法を用いて、子どもたちをイエスのもとに導く努力をしなければなりません。どの子どもにも福音を伝え、彼らを主のもとに導きたいと思えます。

祈り 主よ。あなたがどんなに子どもを愛しておられるかを知って、子どもをあなたのもとに導くことができるよう、助けてください。

あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリアの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。(9)

ここに登場する女性は自分を「サマリアの女」と呼んでいるので、私たちもそう呼びますが、「サマリアの女」というのは、自嘲的な呼び名でした。サマリアの人々はユダヤの人々に対して引け目を感じていました。また、当時、女性は未婚のうちは父親の権威のもとにあり、結婚後は夫の所有物と考えられていました。彼女はユダヤ人との間に、また男性との間に隔ての壁を持っていたのです。

そればかりでなく、「サマリアの女」には夫を五人取り替え、今、夫でない男性と生活しているといううしろめたさがありました。彼女は他の女性仲間との間にも隔ての壁を持っていたのです。

しかし、イエスはそんな彼女にも、彼女が持っていた隔ての壁をこえて福音を伝え、ご自分がメシアであることを明らかにされました。

私たちは社会的に疎外されている人々との間に隔ての壁を作りますが、それと共に社会的地位を持つ人々に対しても隔ての壁を作ることがあります。あんなに恵まれた人には福音は要らないし、話しても聞いてくれないだろうと、勝手に思い込んでいます。パウロは「ギリシア人にも未開の人にも、知識のある人にも知識のない人にも」(ローマ1・14)と言って、王や総督、哲学者、知識人、指導者にも伝道しています。伝道に「上層の人」や「下層の人」といった区別はありません。すべての人が福音を必要としているのです。

祈り 主よ。例外なく「すべて」の人に福音を伝えることができるよう、助けてください。

あなたがたも証しします。初めからわたしと一緒にいたからです。(27)

私たちが誰か他の人を紹介したり、推薦したりするには、その人を良く知っていなければなりません。学生時代、机を並べて勉強した、同じ学生寮で生活した、同じ職場で長年働いたなど、その人と「一緒にいた」時がなくてはなりません。十二弟子は、およそ三年の間、文字通りイエスと寝食を共にし、イエスと「一緒に」いましたので、イエスを証しする使命を与えられ、それに答えることができたのです。

では、イエスと一緒にいたことのない二千年後の私たちは、イエスを証しすることができないのでしょうか。そんなことはありません。主は「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」(マタイ28・20)と言われまし

た。信仰によって、私たちは「イエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、…喜びに躍っています。」(第一ペテロ1・8)また、主は聖霊によって私たちと共にいてくださるのですから、聖霊を受けている私たちは、「聖霊の証」を持つことによって主を証しすることができます。

パウロも地上におられた主と共に過ごしませんでしたが、復活の主に出会い、聖霊によって主と共に生き、主の証人となりました。主が、十二弟子に加えてパウロを選んで使徒としたのは、十二弟子以降に主の弟子となり、主を証しする者とされる人々の手本とするためであったと思います。祈り 主よ。私が聖霊によって主の証し人とされていることを知り、聖霊の証によって伝道できるように、助けてください。

それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。(38)

ペンテコステの日のペテロの説教はイエスが弟子たちに命じた通りのものでした。主は天に帰る前、弟子たちにごう言いました。「次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』あなたがたは、これらのことの証人となります。」(ルカ24:46~48) ペンテコステの日、ペテロはこの言葉の通りに「このイエスを、神はよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です」(使徒2:32)と言って、主の復活を証しました。また、「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、

イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい」と言って、主の言葉通り「罪の赦しを得させる悔い改め」を宣べ伝えていきます。

伝道を考える時、私たちは福音を「どのように伝えるか」ということに苦心します。とくにまことの神も、イエス・キリストも知らない人々にどう話したらいいだろうかと迷いもします。「どのように伝えるか」は決してないがしろにできないことですが、それ以上に大切なのは「何を伝えるか」です。今日、伝道の方法が変わることによって伝道の内容までも変えられつつあります。主が「これを伝えよ」と託してくださった福音を正しく理解し、そのままに伝えることが、今日ほど求められている時代はありません。

祈り 主よ。あなたから受けた通りの福音を伝えることができますよう、導き、助けてください。

天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。(12)

ペテロが神殿の入り口でひとりの人を癒したことから、ペテロとヨハネはユダヤの指導者たちの尋問を受けることになりました。指導者たちが「おまえたちは何の権威によって、また、だれの名によってあのようなことをしたのか」(使徒4・7)と尋問したように、「イエスの御名」は「イエスの権威」と同じことでした。ペテロは病気の人を御名によって癒し(使徒3・6)、人々に御名よって語りましたが、それはイエスの権威によって癒し、語るということでした。

指導者たちはペテロとヨハネに「イエスの名によつて語ることも教えることも、いっさいしてはならない」(使徒4・18)と命じましたが、ふた

りは「私たちは、自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません」(使徒4・19)と言つて、イエスの御名によつて語り続けました。

主が「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています」(マタイ28・18)と宣言したように、イエスは最高の権威を持つています。「イエスの御名によつて語る」とは、この最高の権威によつて、最高の権威のある方を伝えるということです。イエスの御名の他「私たちが救われるべき名は人間に与えられていない。」このことを確信することによつて、力ある伝道がなされるようになるのです。

祈り 主よ。あなたの名で呼ばれている私たち「キリスト者」に、あなたの御名の権威を確信させてください。

散らされた人たちは、みことばの福音を伝えながら巡り歩いた。(4)

教会はエルサレムで始まり、エルサレムでその基礎が築かれました。しかし、教会はエルサレムから「ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで」(使徒1・8) 広がっていかなければなりませんでした。使徒たちはそれを忘れていたわけではありませんが、「地の果まで」の伝道に乗り出すには時間がかかりました。

そして、その時が来ましたが、それは、ステパノの殉教を契機にしたエルサレム教会への激しい迫害によって引き起こされました。この迫害のため、「使徒たち以外はみな、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされた」(使徒8・1) のですが、その「散らされた人々」がアンティオキアまで来て、ユダヤ人以外の人、ギリシャ語を話す人た

ち、つまり、異邦人にも福音を伝えたのです。そして、アンティオキアに異邦人教会が生まれ、このアンティオキア教会がバルナバとパウロ、後のパウロを宣教旅行に送り出したのです。第二回の伝道旅行では、パウロはエーゲ海を越え、アジアだけでなくヨーロッパにまで福音を伝えました。

迫害者たちは、エルサレム教会を潰せば、教会は地上から消えると思つたのでしようが、実際には、それが教会を「地の果て」まで広げることになったのです。しかも、主は、迫害の先鋒に立っていたパウロを回心に導き、彼を「地の果て」までの宣教師パウロとしたのです。主は、迫害や、かつての迫害者さえも、福音の拡大のために用いました。主の知恵はなんと深いことでしょう。祈り 主よ。あなたの知恵と力に信頼して、臆せず福音を伝える私たちとしてください。

導いてくれる人がいなければ、どうして分かる
でしょうか。(31)

聖書は世界で一番多く出版されている書物で、
いつの時代もベストセラーの中のベストセラーで
す。戦後、アメリカの教会の支援を受け、すべて
の家庭に一冊づつ新約聖書が配布されたことがあ
りました。私をはじめして聖書を読んだのは、家に
あつたその新約聖書でした。聖書の言葉は教科書
にも紹介されていて、日本で聖書の言葉に触れた
ことのない人は誰もいないほです。まして、ア
メリカではなおのことでしょう。

しかし、ほとんどの人は聖書を読んでいても、
それが何を意味しているのか理解できないでいま
す。エチオピアの宦官も馬車に揺られながらイザ
ヤ書53章を読んできましたが、その意味が分かり
ませんでした。ピリポが馬車に近づいて「あなた

は、読んでいることが分かりますか」と尋ねる
と、宦官は「導いてくれる人がいなければ、どう
して分かるでしょうか」と答えています。真剣に
聖書を読む人の心にはこれと同じ叫びがありま
す。私たちもピリポのように、そうした人々の
「導き手」になりたいと思います。

「導き手」になるためには、必ずしも高度な聖
書の学びが必要というわけではありませんが、基
本的な知識は必要です。ピリポが「この聖書の簡
所から始めて、イエスの福音を彼に伝えた」
(35) ように、イエス・キリストが聖書の中心で
あることを理解し、人々をキリストに導くことが
できるようになりたいと思います。
祈り 主よ。人々と共に聖書を学ぶ時、聖書から
あなたをはつきりと語るができる私たちにし
てください。

今、私たちはみな、主があなただにお命じになつたすべてのことを伺おうとして、神の御前に出ております。(33)

コルネリウスはイタリア人であるにもかかわらずイスラエルの神を信じ、まことの神に祈る者となっていました。まだイエス・キリストを知りませんでした。彼は、聖書で「神を敬う人」や「改宗者」(使徒13・43)と呼ばれている人々のひとりでした。

コルネリウスは祈りの中で天使のお告げを聞き、ペテロを招き、ペテロから福音を聞いて、キリストを信じる者となりました。この箇所は異邦人伝道にとつて大変意義深い出来事を語っているのですが、私たちはここから福音を聞く者の態度についても学ぶことができます。コルネリウスはまず、祈りによって心を整え、福音を聞きまし

た。次に、自分ひとりだけではなく、自分に関わりのある人をみな招いて、共に福音を聞きました。さらに、神が語ることに聞き従おうとする素直な心を持つていました。

福音は、語る者が自らと語る言葉を整えるだけでは伝わりません。それを聞く側もまた心を整えている必要があります。特別な伝道集会で決心者が与えられるのは、その場が祈りによつて整えられ、神の言葉を待ち望む人々が集まるからです。

そのような場では、今まで福音に関心を示さなかつた人々もまた、心が開かれていきます。神の言葉を聞こうとして人々が集まるところに、聖霊が働き、神の力が現れるからです。

祈り 主よ。私たちのどの集まりも、神の言葉に對して開かれ、整えられたものでありますように。

パウロが、イエスと復活を宣べ伝えていたからである。(18)

パウロはアテネの町では、会堂でユダヤ人やユダヤ教への改宗者たちと論じ、広場ではギリシア人と論じていました。神を知るユダヤ人と、まことの神を知らず偶像を拜むギリシヤ人への伝道では、おのずとそのアプローチは違います。しかし、パウロはそのどちらにも「イエスと復活」を伝えました。対象は変わっても、福音の内容は変わらなかつたのです。なぜなら、「福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力」(ローマー・16)だからです。パウロは「ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰」(使徒 20・21)を説いてきました。

アテネの人々は「何か新しいことを話したり聞

いたりすることだけで、日を過ごしていた」人たちでした。パウロの話すことに真剣に耳を傾ける人たちではありませんでした。しかし、パウロは、彼らに迎合しませんでした。パウロは博学な人でしたから、アテネの人々の好奇心を満たすような話ができただしょう。しかし、パウロは彼らの「知的エンターテインメント」のためではなく、神のために語りました。パウロの話が復活に及ぶと人々はあざ笑ったり、「その話はまたあとで」と言い、去っていきましたが、パウロが福音を語ったので、信仰に入る者が数名起こされました。たとえ少数であっても、福音が語られるところには、信仰が生まれるのです。

祈り 主よ。どんな時でも、聞く人の歓心を買うためではなく、その人が信仰に導かれることを願ひ、あなたのために語る者としてください。

しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。(23)

十字架のキリストはユダヤ人にはつまづき、復活のキリストはギリシア人には愚かなことでした。しかし、パウロは、どこの会堂に行つてもユダヤ人が喜ぶようには語りませんでした。アテネの広場でギリシア人を相手に論じたときも、彼らにこびませんでした。ユダヤ人にも「十字架につけられたキリスト」を宣べ、ギリシア人にも「復活されたキリスト」を伝えました。

パウロはユダヤの律法にも、ギリシアの哲学にも通じた博学な人でしたが、「福音を、ことばの知恵によらずに宣べ伝え」(第一コリント1・17)しました。それは、どんな知恵も知識も否定するという意味ではありません。パウロは「人間の知恵」ではなく、聖霊による知恵を求め、用いる

よう教えています。聖霊の賜物の第一と第二のものは「知恵のことば」と「知識のことば」(第一コリント12・8)です。

福音を伝えるのに、学問や芸術など様々なものを道具として、また器として用いることができず。しかし、本来道具であつたものが主となり、器であるものが中身を変えてしまう危険はいつでもあります。福音が哲学や道徳、処世術、あるいはエンターテインメントにさえなることがあります。どんな方法、手段を用いる場合でも、それが「福音の光」(第二コリント4・4)を損ね、隠すものにならないよう注意しましょう。聖書にあるままのイエス・キリストを伝えることに心を砕きたいと思えます。

祈り 主よ。福音を福音として伝えることができよう、常に、私たちを教え、導いてください。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、(23)

「すべての道はローマに通じる」と言われたほかに、ローマ帝国では道路が整備されており、ローマの軍隊はその道路を使って迅速に兵を移動させることができ、「ローマの平和」と呼ばれる時代を保つてきました。人々はどこにいてもその街道をたどればかならずローマに到着することができました。

聖書は救いにいたる道を示すものですが、とりわけ、ローマ人への手紙には救いにいたる道が順序立てて書かれており、ローマ人への手紙の要約をたどることによってイエス・キリストの救いを伝えることができます。この方法は“Roman Road to Salvation”と呼ばれ、ローマ3・23で「罪」、5・8で「神の愛」、6・23で「救いの

賜物」、10・9～10で「信仰の告白」、10・13で「救いの確信」を語ります。聖句やその順序は、この方法を使う人たちの間でも少し違いがあります。相手にあつたものを選ぶと良いでしょう。

しかし、どんな場合でも、「すべての人は、罪を犯した」という一点は避けて通ることはできません。なぜなら、キリストの救いは罪からの救いであり、福音は罪の赦しの福音だからです。「すべての人」というからには、「そこに自分が含まれているのだ」ということが分かることから救いの道が始まります。聖霊が「罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせ」(ヨハネ16・8)てくださることを願いながら、臆せず、福音を伝えましょう。

祈り 主よ。人々に救いへの道を示すことのできる私としてください。

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。(10)

“Roman Road”の終着点はイエス・キリストを「心に信じ、口で告白することです。「聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません」(第一コリント12・3)とあるように、人を信仰の告白に導くのは聖霊ですが、聖霊は、御言葉を用い、御言葉を語る人を用います。伝道は「折伏」や「説得」、また「強要」ではありませんから、心に信じていない人から無理矢理に告白を引き出すようなことがあつてはなりません。しかし、福音を語っても、信仰の告白を期待しないというのも間違っています。聖霊が働いてくださることを祈りながら、福音を聞いた人が「心に信じ、口で告白する」ように導くことは、とても大切なことです。

それは、神が「心に信じ、口で告白する」者を救うと定められたからです。福音は、耳で聞き、心に入りますが、それがほんとうに信じられたなら、必ず、信仰の告白が口から出てきます。福音は聞かれるだけのものではなく、告白されるものでもあるのです。信仰は「耳」から入り、「口」から出るものなのです。

そして、人は「口で告白する」ことによつて「心に信じ」ていることについて確信を持つことができます。私たちが福音を語り、キリストを証しするのは「告白」の行為です。イエスの御名を口にし、それを人に伝えるたびに、私たちの信仰の確信も強められていくのです。

祈り 主よ。私たちの伝道のわざを、私たちの信仰の告白の行為としてください。そして、人々を同じ告白に導かせてください。

福音の奥義を大胆に知らせることができるよう
に、祈ってください。(19)

信仰者は誰もが「キリストの証し人」ですが、
すべての人が説教者、伝道者、宣教師となるわけ
ではありません。私たちはそれぞれに与えられた
賜物に応じて奉仕し、また、それぞれの方法で福
音を証しします。しかし、同時に誰もが、召され
た働き人のために祈り、その人たちを支えること
によって、その働きに与ることが出来ます。主は
「預言者を預言者だからという事で受け入れる
人は、預言者の受ける報いを受けます」(マタイ
10・41)と言い、第三ヨハネ1・6～8は、伝道
に遣わされた人たちを受け入れるなら、「私たち
は真理のために働く同労者」となることができ
ると教えています。

どの説教者、伝道者、宣教師もひとりでその働

きができるものではありません。パウロは力ある
伝道者でしたが、それでも「私のためにも、
祈ってください」と、人々に祈りを要請していま
す。私たちも、伝道のために働こうとする時は多
くの人の祈りを必要とします。信仰の仲間にと祈っ
てもらいましょう。

たとえ、他のどんなことができなくても、信仰
者は「祈る」ことができます。また、祈ってもら
うことができます。そして、互いに祈り合うこと
によって伝道に参加することが出来るのです。

きようも「福音の奥義」が世界中で大胆に語られ
るように祈ろうではありませんか。

祈り 主よ。私が伝道する時、自分の力でそれが
できるかのように考えないで、自分も祈り、人に
も祈ってもらって、あなたの力を求めることがで
きるよう、導いてください。

人々自身が私たちのことを知らせています。(9)

ある医院の受付にこんな掲示がありました。

「もし、ご不満がありましたら、遠慮なく私たちにお知らせください。もし、お褒めにあずかることがありましたら、私たち以外の人にお話ください。」確かに、自分で自分のことを宣伝するよりも、他の人に「あそこは親切で、丁寧でとてもいいよ」と宣伝してもらうほうがもつと効果があります。それはクリスチャンの信仰も同じです。

テサロニケの教会はパウロの伝道によつて生まれた教会でした。テサロニケのクリスチャンは、パウロが語った神の言葉を受け入れただけでなく、神の言葉を宣べ伝える者となりました。「主のことばがあなたがたのところから出て、マケドニアとアカイアに響き渡った」と言われるほど

に、その伝道は熱心なものでした。

そのため、テサロニケの町では、町の人々がクリスチャンの信仰について何度も聞かされ、それをよく知るようになりました。そして、人々が「クリスチャンたちは神の言葉を聞いて神を信じるようになった。そして、神の御子が天から来るのを待っているようだ」と他の人々に話すようになったというのです。クリスチャンがその信仰を明確にするとき、クリスチャンばかりでなく、それを見聞きした人々もまたそれを伝えてくれるようになり、福音が広がっていくのです。テサロニケの町であったことが、私たちのまわりでも起こることを期待しましょう。

祈り 主よ。まわりの人々が、私たちの信仰を語るまでになるほどに、私たちが信仰に生き、それを語ることができるよう、助けてください。

だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。(9)

伝道や宣教は、教会を大きくするためでも、「キリスト教」の影響力を拡大するためでもなく、神が「だれも滅びることがないように」と願っておられる、愛のみこころに動かされてすることです。神は、その愛のみこころをヨハネ3・16でこう表しておられます。「神は、実に、そのひとり子をお与えになつたほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

神に愛されていない人は誰ひとりありません。神は「一人として滅びることなく」、すべての人が悔い改め、信仰を持ち、救われることを願っておられます。ですから先に救われた私たちも同じ願いをもって福音を伝えるのです。「この人

も」、「あの人も」と、ひとりひとりを大切に福音を伝えていくとき、結果として多くの人が救われ、教会が形作られ、さらに多くの人々へと福音が伝えられるようになります。

私たちは民族の救いや世界の宣教のために祈りますが、実際の伝道は「ひとり」から始まります。この人のためにと、祈り、福音を伝え、信仰に導く具体的な伝道がなければ、どんなに「すべての人の救い」「世界の宣教」「民族の救い」を叫んでも、それらは達成されません。あなたは、誰に福音を伝え、誰を信仰に導こうとしているでしょうか。そのような人を持ち、その人のために祈っているでしょうか。

祈り 主よ。伝道がかけ声だけで終わることがないように、この私から、あの人への伝道から始めることができるよう、導いてください。

彼は地に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、言語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。(6)

世の終わりと福音の宣教は密接に結びついています。「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます」(マタイ 24・14)とある通りです。第二ペテロ 3・12に「神の日が来るのを待ち望み、到来を早めなければなりません」とありますが、そのためには、あらゆる人々に福音が伝えられる必要があります。

福音は、それによって救われた人々によって伝えられるものなのですが、世の終わりには天使もまた福音の宣教に携わります。しかし、それは、聖徒たちがすでに証した福音を確認するものだと思います。「天使が伝道してくれるのなら、

私たちは伝道しなくてよい」などと考えるのは聖書の教えるところではありません。

天使は、差し迫った神の審きの時を前に「神のさばきの時が来た」と宣言しますが、その前に「信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあらうことがなく、死からいのちに移っている」(ヨハネ 3・24)「だが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしてくださるのです」(ローマ 8・34)という赦しの福音が伝えられていなければなりません。世の終わりが迫っている今はなおのことです。

祈り 主よ。人々が「永遠」をあなたと共にあることができるため、私たちに「永遠の福音」を語らせてください。



Penguin Club

www.penguinclub.net